
白萩

夕霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白萩

【Nコード】

N1497Y

【作者名】

夕霧

【あらすじ】

味？ 政宗がお母さんに毒を盛られた後の話。何となくキャラ崩壊気味？

海誉かいよなる僧が奥州の街道を歩いていたのは、日も暮れる間際のことだった。

この僧は武蔵国にある大悲願寺の住職であり、名の知れた高僧でもある。その海誉が何故奥州へと向かっているかというところ、一年ほど前、親交のあった伊達家の当主が殺されたという話を聞いたからであった。

しばらく音沙汰が無いと思っていたが、まさかそのようなことになつていようとは。

その事実を知っていてもたつてもいられず、寺を飛び出したというわけだ。

さて、この海誉がそろそろ宿をと考えていた時、馬の側に倒れている二人の子供の姿を見つけた。兄らしき少年が弟らしき幼子を抱いて動けないでいる。近づいて見てみれば、子供の首から夥しい血が流れて兄の着物を真っ赤に染めていた。

「しつかりせい！ 一体何があつた！」

少年の頬を軽く叩いてやると、少しばかり呻いた後すぐに身体を起こし、立ち上がるうとする。しかし何処か痛めたのか、顔をしかめるだけで身体を起こすことが精一杯だった。

「馬から落ちたのか・・・どれ、すぐに医者を」

「呼ぶな！」

さつと表情を変えた少年を見て、どうやら何かわけがありそうだと海誉は思った。落馬したらしき少年は動ける状態ではなく、腕の中にいる幼子は今にも絶えそうである。かといって放っておくことなど出来なかった。

「おい、童わらし。何があつたか話してみよ、早くせねばお前の弟が死んでしまうぞ」

少年は怯えたような顔をして幼子を見た後、

「・・・弟が自害しようとした」

と、短く悔しそうに言った。

自害、とは穏やかではない。しかも、このような幼子が。

よくよく見れば、少年の身なりは血で汚れてはいるが上質のものであり、幼子も同様である。武家の子供かと海誉が思った時、少年の右目を隠す黒い眼帯に目がいった。

輝宗様の長子が、確か病で右目の光を失われたと聞いた。そしてそれがきっかけで家臣達が兄弟で家督を争わせているとも。

ようやく合点がいったとばかりに海誉は憔悴しきった顔の少年の頭を撫でる。医者を呼ぶなど言ったのは、おそらく家臣達が探し回っていることを懸念してのことだろう。事情は分からないが、自害するほどの事態であるにもかかわらず城にも頼れず国の町医者にも頼れないという状況は、見つければ殺されるということを濃く匂わせている。

しかし、家督を争い弟を疎んじていたわけではないのだな、と海誉は思う。兄の様子を見ればそれは一目瞭然だった。

「童、ここまでよう頑張ったな。後はこの坊主に任せい。何、これも御仏のお導き、そしてお前達の父上のお導きじゃ」

優しく笑うその顔に、少年は泣きそうに顔を歪めた後、黙って幼子を託した。

「馬がある、それを使ってくれ。コイツはオレのために死んでい命じゃねえ。仏が連れて行こうってんならオレが代わりに」

「馬鹿者、何を言うか！お前が死ねば幼き弟が悲しむであろうが。任せておけい、落ち着いたら文を出そう。・・・儂は大悲願寺の住職、海誉という。そなたの父上には生前世話になった」

少年の目が驚いたように開かれ、海誉は二、三度ほどその頭を撫でた。

「そなたも早う帰れ」

馬に跨り颯爽と掛けていく姿を見送り、少年は気が抜けたようにその場に倒れた。

「政宗様！」

顔を叩かれている感覚に、ぼんやりと目を開く。そこには片倉小十郎の姿があった。

「お気を確かに・・・このようなところで倒れているのでどうしたのかと」

身体を起こし立ち上がるつもりだったが、あばらに痛みが走り思うように身動きが取れない。どうやら先程の落馬で痛めたようだ、と冷静に考えていた。

「ところで政宗様、小次郎様は如何なされました。それに乗ってきた馬も」

正直に答えたらどうなるだろうか。ふと、政宗は思う。

そもそも小次郎が自害をしようとした原因は、母が政宗を亡き者にせんと毒を盛ったことに起因する。本来ならば咎めは母に向くのだが、実母を殺せば外聞も悪い。何より政宗自身が罰する事を拒むだろう。そこで白羽の矢が立ったのが弟の小次郎である。幼いながらも状況を見極めていた小次郎は、何も言わず政宗の前で首を切ってみせたのだった。

それで丸く収まると思っていた小次郎の予測に反して、政宗が異様なまでに取り乱したのだ。そして小次郎を抱えて止めようとする家臣達を振り切り、馬へ乗って城の外へと駆け出した。そして海誓と出会い、今に至るのである。

その流れで事実を言えば、おそらく追って坊主もるとも小次郎を殺すだろう。家督争いの火種でもある小次郎が生きていることを、小十郎が快く見逃すはずが無い。

「・・・小次郎は死んだから近くの川に棄てた。馬は落馬した時に何処かに逃げていった」

嘘としては苦しいが、納得させられるだけの言い訳を思いつかなかった。

「・・・嘘を言うのなら、もう少し信憑性のある嘘をおつきに

なられませ。命を大切になされる貴方が、死んだからと言ってその遺骸を棄てるなどと考えられません」

「死んだらそれは人じゃねえだろ。道端のゴミとなんら変わらねえ・・・棄てたって問題ない」

言い切る前に頬を思いきり叩かれた。その衝撃に一瞬眩暈がしたが、それでも引き下がるわけにはいかないと睨むように小十郎を見つめている。

「本心ではないにせよ、言って良いことと悪いことがあります！・・・どうなされたのかは分かりませぬが、言う気がないのであれば小十郎は探しに行かねばなりません」

そう言っただけで立ち上がるうとした小十郎の袖を掴み、引き止めた。時間稼ぎをしなければならぬ。小十郎の馬術の腕ならば、坊主の後を追うことなど容易い。追いつかれては元も子もないのだ。

「・・・放っておけよ、こんだけ血い流してんだ。もう死んでるだろう」

「ですが、生きている可能性もあります。・・・こうなった以上、小次郎様には咎めを受けていただかなければ」

咎められるようなことは何もしてないだろう、小次郎は。むしろ、咎められるのはあの母だ。幼い頃から母の思惑で愛されてきた弟は、どうして母が自分を手元に置きたがっているのかよく分かっていた。本当に自分が母から愛されているわけではないと知れるほど、小次郎は聡かった。七年、たったそれだけの短い間しか生きられなくて、母の咎めを代わりに受けて死ねだなんて、残酷すぎるだろう？

政宗は小十郎の腰から刀を抜く。そして、痛む身体を何とか立たせ、小十郎に刀を突きつけた。

「・・・何をなさいます」

「お前もか、小十郎。オレから奪うのか」

睨みつけるその目の奥に、深い闇が渦巻いているのを小十郎は見逃さない。そして、その眉をひそめた。

「・・・今ここで、小次郎様を討たねばどうなるか。お解かりで

しょう」

家中の分断に終止符を打つ絶好の機会、そう小十郎は言いたいのだ。このまま家中が割れたままでは、伊達は他国から付け入られ崩壊するのは目に見えている。だからこそ、その根を絶たねばならない。

「だから殺せと？小次郎を」

政宗にそれが出来るはずもなかった。無論、誰が殺しても結局は己が殺したのと同じことと胸を痛めるのは小十郎には承知の上だったが、それでも政宗の身を守るためにはやらなければならないと拳を強く握り締める。

「・・・小十郎がその役目を」

首元に突きつけていた刀が引かれ、政宗が諦めたように深い溜息をついた後、今度は己の首に刃を当てた。その行動に小十郎の顔が一瞬にして青くなる。

「・・・そうやってまた殺して、次は誰を殺す？母上か。そうしてオレは、たった一人残されるのか。なあ、やっぱりオレは国主の器じゃねえよ。家族一つ守れねえのに、どうして国なんてデカイものが守れるんだ、小十郎。・・・流石にもう、耐えるのも限界だ」
刃を引きかけた瞬間その手を小十郎が止める。小十郎の力は強く、手を動かすこともままならない。ならば首を動かすか、などと考えていると水滴が地面に落ちるのが見えた。

「小十郎」

泣かせてしまった、と政宗は思う。しかしそれすらもどうでもいような気がしていた。

身体が急に痛み出したような気がする。視界が揺らぎ始め、そのまま気を失った。

それから六日、あばらに負った怪我自体は大したことは無かったのだが、政宗はほとんど食事を摂らなくなった。何もする気が起きずにただぼんやりと庭先を見つめることが多くなっている。それで

もきつちりと仕事はこなし、普段と変わらないように振舞っている
ので余計に小十郎は心配していた。

完全に、御心を闇に蝕まれているようではないが。

しかし、不安定で危ういには変わりない。だが、今回その闇に
突き落としたのは己である。もし、完全に闇に堕ちたとしても引き
摺り上げることは出来ないだろうと痛感していた。

そんな折、政宗の下に一通の手紙が届く。差出人の名前のないそ
の手紙に小十郎は訝しがっていたが、内容は更に奇妙なものであ
った。

『童より預かりたる“白萩”は、散らずして咲き誇りて候』

一体何のことか、と小十郎が考えていると政宗がその手紙を奪う
ようにして目を通す。

「政宗様、それは一体・・・」

小十郎の言葉が聞こえたのかどうかは分からないが、人目を憚ら
ず政宗はその場に座り込んで突然大粒の涙をこぼした。

「ま、政宗様！？如何なされた」

戸惑ったような小十郎の言葉を聞きながら、ただひたすら声を上
げて泣いた。

海誉が住職を務める大悲願寺は、白萩で有名な寺であると輝宗か
ら聞いたことがあった。この手紙は、海誉が家臣に気付かれないよ
うに、しかし政宗には分かるようにとしたためた文だろう。

散らずして咲き誇りて、即ち生きている。助かった、ということ
だ。

たった一人の大切な弟が生きていたという喜びに、ただ涙が零れ
落ちるのであった。

(後書き)

病んだ政宗様、十四歳のお話。キャラ崩壊もいいところですが、とりあえず弟の小次郎とは七歳差があります。一応設定では政宗様と並ぶほどの才能を持つてるけど、お兄ちゃんのために実は凡人に振舞ってます的なキャラにしています。

さて、本編に至るまでにお父さんは自分で殺しちゃうわ、家督を継いで大忙しだわ、その弔い合戦では一応城は落とすけど物凄い犠牲を出すわで精神的に疲れていたところでお母さんに毒を盛られた上に弟が自害した、でそりゃおかしくもなるよ、という感じで書いています。

政宗の異母弟である末子秀雄と小次郎は同一人物なんじゃないか、という説にあやかかって小次郎を生かしてみました。その件は史実に基づかない完全創作です。でも海誉は秀雄の師匠なので実在した人です。

最後になりましたが拙い文章を最後まで読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1497y/>

白萩

2011年11月2日18時12分発行